

第5節 中学校期の地域資源を利用した支援

大柴文枝 松村勘由

はじめに

特別研究「学習困難児の指導方法に関する実証的研究」(平成7年～平成10年)で対象とした2名の子ども達のその後の経過を追い、中学校期における子どもの実態、指導方法、支援体制について検討した。小学校からの移行をどう進めたか、中学校期の支援はどう行ったか。高校への進学にどう取り組んだかを中心にその概要を報告する。

1. 子ども達のプロフィールとこれまでの経緯

1) 子ども達のプロフィール

幼児期に発音が不明瞭であったり、不器用等を主訴として、地域の療育センター(以下、Aセンター)に通った2人の子ども達である。その後、学習障害と診断された2人の子ども達は、「親の会」を利用したり、地域の学習塾(障害児を対象とした民間の学習塾 以下、B学習塾)を活用しながら、地域の小学校・中学校の通常の学級で教育を受け、現在、高校に在学中である。

<A男について>

幼児期に、ことばの遅れを心配し、小児専門病院、民間の発達クリニックを受診・相談、その後、Aセンターで、不器用さ、ことばの遅れの心配について、ST、OTの指導を受けている。

小学校の通常の学級に就学する。就学後のWISC-Rの検査ではIQが境界線であった。また、Aセンターの医師から学習障害との診断を受け、B学習塾での個別指導を受けている。

小学校在学中は、不器用さへの配慮と学習面での配慮支援が必要とされた。給食の白衣の着脱時や図工科・家庭科での作業について配慮が必要とされた。学習面では、全般に遅れがちであった。地域の学習塾での個別指導で予習的な学習を行い学校での学習に臨んだり、算数の計算問題に習熟することで自信を持つことが出来た。

<B男について>

幼児期に、発音が不明瞭であるということで、STの構音指導と構文指導を受けた。

小学校の通常の学級に就学後、Aセンターの医師よ

り読字障害等を伴う学習障害であると診断され、B学習塾での個別指導を受ける。

B学習塾での個別指導では、文字の読み書き、文章の読解指導を中心に学習した。

学校の学習では、事前に教科書に読み仮名を振ったり、テストでは、問題文を読んでもらうなどの配慮を受けた。

2) 地域療育センター(Aセンター)での取り組み

Aセンターでは、0歳から18歳までの障害や障害の心配のある子どもと家族を対象に相談・検査・評価・療育・訓練および指導を行っている。

A男、B男は幼児期に、それぞれ不器用さや言語の不明瞭さなどの心配で相談と指導を受けている。

Aセンターでは、設立当初より、地域に根ざした療育活動を基本として、利用者相互の自主的な支援体制を構築することに取り組んできた。

学習障害についても、ST、OTが中心となって保護者の学習会活動に取り組み、その後、親の会として独立し運営を進めるようになっていった。

A男、B男の保護者もこの親の会の活動に参加し、「母親学習会」でのLDについての学習や情報交換を行ってきた。また、会員相互の親睦と子ども達の仲間作りをねらいにしたリクレーション活動の「遊びの会」にも参加した。

3) 地域の学習塾(障害児を対象とした民間のB学習塾)での取り組み

B学習塾は、通常の学級に在籍している発達につまづきのある子ども達を対象にしている。幼児期に発達のつまづきがあり通常の学級に就学した子ども達の中で、学習面での支援が必要な子ども達がいる。こうした子ども達は、学校教育の中では個別的な支援が受けにくいという状況があり、学習面でのフォローにポイントをおいた個別指導を行う場として活動が開始された。

A男、B男ともにAセンターでの親の会活動の中で情報を得て利用するようになった。

B学習塾は、その後、中学校期の学習のサポートと高校進学・入試への対策に対応、子ども達に利用された。

2. 小学校期から中学校期への移行期の取り組み

1) 保護者から中学校への情報の伝達

<A男について>

中学校入学前に、保護者の希望で、両親が中学校の校長と面談する。子どもの状況とこれまでの経過について説明する。(入学後の個人面談で担任との話し合

いをすることを確認する。)

< B男について >

地域療育センター（Aセンター）のケースワーカーと市の教育センター指導主事と保護者が進学する中学校を訪問し、校長、教頭と話し合いを持つ。子どもの状況とこれまでの経過について説明する。（Aセンターで指導を受けた子どもの中で同じ中学校に進学する3名のLD児の保護者と同行）

2) 小学校から中学校へ

3月の中旬、次年度の1年担任予定の教諭が、小学校を訪問し引き継ぎを行う。交友関係に関する情報は、学校編成にあたっての配慮のための資料となった。読字困難な状況と指導上の配慮について説明され、内容は、引き継ぎ票によって、中学校の学級担任へ伝えられた。（B男の場合）

3) 小学校から中学校への移行について

小学校から中学校への引き継ぎは、保護者からのアプローチと小学校からのアプローチの両面から行われている。

子どもの個別的な情報は保護者から伝えられる内容が多いが、交友関係など学級編成など集団での状況に関わる内容や学習指導上の配慮については、小学校の教師から伝えられることが必要であろう。

3. 中学校期の学校生活と配慮

< A男について >

(1) 学校生活全般について

A男の在籍校は大規模校で、「サポート級」と呼ばれている知的障害、情緒障害、肢体不自由の3つの特殊学級が認可されている。A男は、この学級について説明を受けているが、3年間を通じて利用することはなかった。

A男については、担任が学年会で説明していたが、他学年所属の教科担当教師には説明されておらず、落ち着きのない本人の行動に対する指導が不適切になったというトラブルが、進学当初に起こった。

A男のクラスには、個別的なサポートの必要な生徒が複数いることもあり、学級全体での本人についての理解は比較的進めやすい状況であった。

進学当初のA男は、小学校と異なる学校生活の仕組みや習慣の理解把握に、多くの時間を要した。特に、翌日の時間割をメモするのに時間がかかること、教科による教室移動や学校行事に伴う移動で、行く場所が分からなくなること、体育館や格技室における靴の使

用のルールに伴う戸惑いや躓きが、大きかった。これらのことについては、最初は担任が声をかけていたが、その後、A男と同じ部活（バスケット部）に所属する生徒にサポートを依頼した。2学期には、中学校生活に慣れてきたこともあり、A男はこのサポートをうっとうしく思うようになった。

中2時は、委員会の仕事（学習委員、保健委員）にも真面目に取り組む一方、部活中心の学校生活だった。素直に熱心に練習に取り組み、ルールの分からないところは友だちに聞いていた。他校との練習試合の集合場所が分からず、友達に繰り返し尋ね嫌がられる面もあった。部の顧問は、後で別室に呼んで手帳に記録させるといった配慮を行った。

中3時は、学校が学年全体について交友関係を重視し、配慮した学級編成を行った。さらにA男の学級では、席替えや班編成について、単に生徒の自主性に委ねるのではなく、2～3人のグループができるよう担任が配慮した。A男のペアは、部活で一緒に、友達関係の調整のできる生徒で、A男が班長となった。

クラス担任は毎年替わったが、学年主任がバスケット部の顧問で、3年間を通じて継続した配慮がなされた。

(2) 教科学習について

どの教科でもまじめな学習態度で臨んでいるが、周囲の子どもと同じようにはできないことが多い。とくに不器用さからくるハンディは大きかった。例えば、調理実習で食材を切ること、リコーダーで一曲を通して吹くこと、はんだこての使用、彫刻などである。

プリント学習では、取り組んでいる箇所が分からなくなり、周囲に聞くことをしていた。英語は読み書きよりも、話す・聞くの学習のほうが取り組みやすかった。

選択教科ではA男は体育を選び、この時間に行ったバスケットとサッカーでは、ドリブルの技術を認められ、この科目の通知簿の評価も高かった。このことは、A男の自信となった。

テストについては、出題範囲の提示だけでは困難で、数学や英語では具体的な問題の内容を示す配慮がなされた。また、内容を選択肢で尋ねる形式で問題を出すなど出題の工夫も一部教科では行われた。

本人および保護者は、教科での個別的なサポートについては、補助の先生がつくことより、他の生徒に知られない所でのサポートが行われること、選択科目については特定の教科の選択だけではなく、全科目にわたり学習内容について選択できる工夫がなされるといいと、筆者らに語った。

< B男について >

(1) 学校生活全般について

B男は、サポート級のある小規模校が在籍校であった。B男の場合も、自分はサポート級の生徒とは違うということで、そこを利用していない。

1年生時の担任が、入学直後の4月の学年会でB男について説明し理解を求め、他学年担当の教科担任には、個別に説明した。また校長が教育センターへ依頼し、5月校内でLD研修会を行った。

1年生の1学期中間テスト後に、LD3人の生徒の親と、校長、教頭、各教科担任のうち3人の教師との話し合いが行われた。その場には中間テストの得点一覧と、この3人の生徒について、各教科担任が記述した学習状況の一覧表が提示された。小学校時代に最も評価が高く、B男自身が得意と思っている数学だけが、平均点の半分を得点できていたが、他の教科はそれに及ばない状況であった。

B男は既に述べたように読字障害があるが、中学校進学を控えた11歳6か月時のWISC-R検査でも知的能力の遅れは認められていない。本人の有するこのような特徴もあって、中学校生活での不適応感は徐々に高まっていった。また、他の生徒からの言葉によるからかいやいじめもあった。B男は中学校の3年間を通して長期欠席に陥ることはなかったが、中2では、「体がだるく疲れている」といった訴えの登校しぶりがあり、月2～3日程度休むようになった。この傾向は3年時にはやや軽快したが卒業まで続いた。

こうした状況もあり、2年生時に替わった担任は、学校で起こったことについて、家庭に具体的に事実を伝えることを行った。家庭では、学校で起こった出来事について本人が口を閉ざしているため、担任から事実の報告を受けることは、学校での様子が分かり安心感をもつことができたことと、筆者らに語った。そして、このことを通し担任への信頼は厚いものとなった。

3年生への進級に際し、家庭から学校側に担任を持ち上がりにして欲しいという希望が出され、受け入れられている。また、クラス編成などについても、親の会で一緒の同学年の他の2人の親と共に、具体的な提案を行った。その一つは、男女別に分かれた体育の授業は、男子生徒50名に対して1人の教師が担当するため、教師の目が届きにくく、この時間中にいじめを受けることが多々あったこともあり、複数の教師で担任してもらえるよう申し出た。また、仲間が一緒の学級になることで、教師の目の届かないところで起こったことや、仲間同志の視点からの話も聞きやすいと考え、B学習塾での仲間であるLDの生徒3人を同じ学級にしてほしいと希望した。これらのことも校内の検討を経て、配慮された。

B男は、文化祭ではグループ活動に参加し、作業の片付けなど他の生徒の仕事も引き受けきちんとする優

しい性格で、マラソン大会は嫌という気持ちもあったが、練習での走り方を担任から褒められ、当日は懸命に走り家族も応援に来るなど、学校行事は自分なりに楽しんだ。夏期の自由課題として提出された習字作品は、家庭で祖父から習ったもので、校外のコンクールで入選し、本人の励みになった。また、自己紹介や弁論大会では、学級担任が事前に原稿を用意させ、家庭で練習して臨むことで、やり遂げることができた。

部活については3年間バトミントン部に所属した。練習試合に出るなど顧問からの配慮はあったが、疲れで休むこともあり、特に学校生活を充実させる励みにはならなかった。

(2) 教科学習について

授業での傾聴態度はよく、一生懸命やっているが、授業の進度にはついていけない。

国語は、2・3年時の学級担任の担当教科であったこともあり、積極的な工夫が行われた。例えば読解はプリント学習が中心で、プリントは同類の設問を複数用意し、習熟度に応じて選択し解答できるように作成してあるため、本人も自分のペースで学習でき、読み取った内容を文章にすることも徐々にできるようになっていった。授業の進め方は、内容を明示し、予告して学習に参加させるという配慮が行われた。

数学では、連立方程式も大体分かるなど計算が大好きで、3年間を通じてテスト結果で補習対象になることはなく、本人は得意科目としていた。各クラスには、本人より低得点の生徒が10人近くいる状態であった。一方、英語は大の苦手であった。

テストについては、入学当初、問題に読み仮名をつける等の配慮がなされたことはあったが、教師集団の中から公平という観点からの問題の指摘があり、この配慮は徹底されなかった。数学の担任は、漢字で書いてある用語を理解してほしいという考えであり、社会のテストでは全部ルビが振られた。B4用紙で4枚というテストでは、量が多くB男は全問を読み通すことができなかった。また、テストが必須問題と選択問題から構成されていて、意味が理解できず解答できないこともあった。

4. B学習塾での支援

1) 学習サポートについて

A男、B男は、ともに中学校時代を通じて小学校期に引き続きB学習塾を利用した。

学習する教科は、A男は数学と英語、B男は数学と国語で、この学習サポートは個別指導で行われた。学習内容は、小学校高学年頃から2人とも、学校の学習

進度に合わせ、新しい学習内容に入る前に、事前に先取りする形の予習をすることで、授業に安心して参加することができるようになっていた。また、テスト時は、発表されたテスト内容に対応した復習を行うことで、若干であれテストで得点もできていた。この2つの点から、2人にとって学習塾は大切な場であった。

A男は、中学時代、部活動の疲れや学習内容の難しさもあり、学習塾の個別指導でも学習に集中しないことが増えたが、テストの直前は勉強した。

B男は、学校を休んだ日も学習塾には行った。学習塾の指導者は、2年生時に専門家の助言で、英語の苦手感に対しワープロのローマ字入力の指導を行い、ローマ字を使つての学習も進めた。また、パソコンでCDを使い、漢字の読みの学習を行った。B男は「僕は受験生だから」と個別指導の時間より30分早く来て、自主的に漢字学習に取り組み、中学卒業時まで、小1～3年相当の漢字の読みと部首について習得した。

2) 高校進学への対応について

中学校卒業後の進路指導は、それぞれの中学校で2年生の後半から始まった。

A男とB男の場合、LD親の会を通して入手している情報も多く、進学先の選択はスムーズで、2年時には、進学先はほぼ絞られていた。これについては、本人の抱える困難さと通学距離を考慮した選択であったので、家庭の希望と学校の方針は一致していた。

入試対策としては、B学習塾で教科学習のサポートのための個別指導とは別枠で、グループ指導の時間を設定し行われた。

このグループ指導は、A男とB男を含め、いわゆる軽度発達障害のある中学3年生の生徒5人で構成され、土曜日の午後に行われた。5人のメンバーは、ほぼ同レベルの力をもっていて、最初に1時間指導を受け、その後の30分間は、仲間同志でポケモンカードなどの遊びをして、自由に楽しんだ。

指導内容は、面接練習や作文の練習など、一般常識的なことが中心であった。過去の受験問題集から練習問題を選び、「〇〇高校を受けてみよう」という“ごっこ遊び”の形式で進められた。面接や作文は、設問やテーマにそってまず口頭でやり取りし、その後に筆記するという手順で指導された。テーマは、「家族」「志望の動機」「中学校での部活動」「私の長所・短所」「将来の夢」などであった。

面接指導では、指導者が丁寧な言葉で質問しても、仲間同志や家族との会話で使用している「おふくろ」「おやじ」「お母さん」「お父さん」「オレ的には」などという表現をするので、まず面接の場での基本的な言葉使いを教えていく必要があった。また、椅子に座り

姿勢を保持することができず、5分間姿勢を保つことができるようになるのに1年間を要した。なおA男は「先生受けがいい」という自己意識があり、面接学習をたびたび休んだ。

A男、B男にとってB学習塾での支援は、教科学習の補い、テストや高校受験への対策という面からも重要であったが、特にグループ指導終了後の30分間の5人の仲間との遊びや会話は、背伸びする必要のない等身大の自分として同年齢の仲間と交流できるもので、学校でも家庭でも得難い居場所であったと考えられる。

5. 高校生活について

A男とB男は共に、定時制（昼間の3年間課程）のC高校に、作文と面接試験のある推薦入試で合格し、入学した。

C高校は、入学を希望する生徒を対象とした学校見学会を午後4時以降などに10数回実施している。学校を良く知った上で、この学校で学ぶという本人の意欲を重視した選抜を行っている。学校側は教科学習、社会人としてのマナー習得の双方に力を注いでいて、生徒たちは身だしなみを整えることや、挨拶の励行が指導されている。

1年生は、英語・数学・国語は自主作成した教材を用いた習熟度別の学習を行っている。中学校時代までの学力が不十分な生徒も多く、「勉強って、そんなに難しくなかった」など学ぶ楽しさを体験しながら、基礎学力を身に付けることを目標としている。

テスト成績によっては、追試と補習が課せられる。補習では目標を設定しそれをクリアすることが求められ、与えられた課題について努力する姿勢が大切とされている。例えば、B男の国語の補習課題は、教科書写し3回で、やや長い単元が対象であった。高1の1学期を終えてみて、テスト範囲は事前に知られることが分かったので、家庭では、勉強の応援はできると考えている。数学・国語については、家庭の希望により、高1の夏休みからB学習塾での週1回のグループ指導が再開された。

部活動は全員参加で、運動部と文化部があり、仲間と楽しむこと、自分らしさを作ることを目指している。A男は中学時代からの希望であった軟式野球部、B男は中学校と同じバトミントン部に所属し、夏休みは家でもラケットの素振りの練習をしている。

高1の夏休み時における本人たちの進学先への感想は、次のようであった。A男は「中学校は楽しかった。高校では言葉使いや挨拶に先生たちがうるさいのは分かっていたが、思った以上だった」。B男は「中学より楽しい。学校見学に行って、真面目で挨拶をきちんと

するところがいいと思った。実際、入学してみて、予想通りで、厳しすぎることはない」ということであった。

6. まとめ

1) 小学校から中学校への移行時の情報伝達について
小学校からは交友関係など学級編成に関わる情報は伝わるが、本人の抱える学習上の困難やそれらに対する学習指導上の配慮についての情報は、引継ぎ票で伝えられる範囲にとどまることもあり断片的である。後者の情報については、小学校時代に関わっていた専門機関（Aセンター）のスタッフや保護者が学校側や担任に直接伝えることの方が役割が大きかったと考えられる。

2) 中学校内での情報伝達と共通理解について

A男、B男の学校では、学年会において学級担任が生徒について説明する機会はあるが、中学校は教科担任制であるため、1人の生徒に多人数の教師たちが関わり、他学年にも教科を担当する教師がいる場合もある。しかし、この2つの中学校では、学校内に生徒が抱える問題について3年間を通して配慮するキーパーソンがいない。また、生徒の抱える問題に関する生徒個々についての個人ファイルもない。そのため、LDへの理解や躰きへの配慮についての情報伝達が不十分になっていると思われる。したがって、学級担任が替わる毎に専門機関（Aセンター）のスタッフが学校訪問をして情報伝達していた。口頭による説明以外にも専門機関や学習塾での取り組みも含めた個人ファイルがあると、機会あるごとに本人の抱える困難を確認し、配慮の在り方などについて共通理解をしていきやすいと思われる。

3) 中学校での支援体制について

中学校では、交友関係や生徒指導上の配慮については学校全体が共通の視点に立つことができるが、B男のテストでの問題文に読み仮名を振ること（ルビ振り）に見られるように、学習面での配慮やサポート体制については、学校全体が統一した配慮を行う段階に現状では至っていない。学習障害等に関わる支援については中学校の中での実践の歴史が浅いことが大きな要因と思われる。

部活動は、生徒にもよるが、A男にみるように顧問の教師が3年間を通じて生徒に関わることができ、中学校生活全体を支える居場所になることが学習障害のある生徒についても示された。

A男、B男がサポート級を利用しなかったのは、B学習塾のサポートがあったことにも理由があると思わ

れる。また、A男は、中学校入学直後は移動などに戸惑いがあり、サポートを必要としたが、新しい生活に慣れるにしたがい、そのサポートを煩わしく感じるようになってきた。このことは、中学校年齢の生徒の特徴として、サポートに際し自尊心への配慮が必要であることを示していると思われる。したがって、学校教育の中でサポート体制を構築していく際にこの点が重要となる。

さらにまた、B男は中学校でいじめを経験し登校しづりがあった。これらは、学習障害のある生徒達に起こりやすい二次障害と言えるだろう。したがって、いわゆる不登校やいじめの背景には学習障害等の問題があることに留意していくことが必要であろう。

4) 高校進学について

LDと診断されているA男、B男は、推薦入試制度を利用して比較的無理の少ない高校へ入学した。入学後のB男は、中学時代の登校しづりを乗り越え、進学先のC高校について中学校より楽しいと述べている。学校見学などを通して、学校の状況を承知した上で自分に合った進学先を選択した結果であろう。また、親の会を通じて多くの情報があったことも、適切な進路選択ができたことにつながっていると思われる。

5) B学習塾の利用について

中学校時代の私塾利用は、結果的には中学校のテストと高校入試への対策の意味合いが大きかった。またB男には、ローマ字入力や漢字の読み練習など、学友には知られずに、本人自身の学習の困難に向かい合うことのできる場でもあった。さらに、A男、B男には仲間同士が対等の関係で交流できる場であったことにも、大きな意味があったと思われる。

おわりに

学習障害等の児童生徒への中学校期における支援について、小学校からの移行、高等学校への進学に向けての取り組みを中心に、学校での指導の状況と地域資源の活用について報告した。地域療育センター、教育センターの支援を受けて、子どもの実態や指導に関わる情報の引き継ぎを行ったり、障害のある子どもを対象にした民間の学習塾を活用等を通して、進学に備えたり、課題に対応した。また、この学習塾がLDの子ども達の仲間が集う情報の交換や心の交流を行う場として機能し子ども達の中学校生活を支えたことも注目される。